様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2013
課題番号：２０７３０５６３

研究課題名（和文）Ｇ．Ｓ．ホールの児童研究と特別な教育的配慮の理論と実践に関する史的研究

研究課題名（英文）Historical Study of G.S.Hall's Child Study, Theory and Practice of Special Educational Consideration

研究代表者
千賀　愛（Senga, Ai）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０３９６３３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、クラーク大学の児童研究所の史料やホールの往復書簡などの分析を通して、ホールの児童研究が児童研究所を拠点として遅滞児や特別学級の子どもの相談や教師の研修に関わっていたことが明らかになった。主に①児童研究所の組織と運営におけるG.S.ホール、②地元教師への研修内容、③遅滞児への相談活動の視点から検討を行った。

また1898年から１９１０年代におけるウスター市の公立学校の特別学校・学級で行われた多様な困難のある子どもに対する特別な教育的配慮についても議論を行った。ウスターには、特別学級又は無学年制の学級と、独立した特別学校という二つの種類の特別学校があったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Data for this study were mainly collected from reports and proceedings on child study around 1910, and the G.S. Hall Papers with correspondence, and the Clark University Papers with annual registers in the special collection of the Clark University Library.The analysis was based on the following three points: (1)G. S. Hall in the organization and administration, (2)in-service training for local teachers, and (3)guidance and consultation regarding sub-normal children.I have also discussed special educational consideration for children with various difficulties in public schools with a particular focus on special schools and special classes in Worcester from 1898 to 1910.In Worcester, there were two types of special school: Special or ungraded classes and self-contained special schools.

研究分野：特別支援教育

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：G.S.ホール　児童研究

１．研究開始当初の背景

2007 年度に特別支援教育が制度化され、通常学級の様々な特別ニーズをもつ子どもの教育の実質的保障が大きな課題となった。日本でも所得格差の拡大や外国人子弟の増加、健康問題や学習困難を抱える子どものズークを含む多様な困難・ニーズを持つ子どもの公的保障の課題が議論されているが、この問題は 1 世紀以上前のアメリカ合衆国(以下、米国）において近代教育の普及・拡大の過程で顕在化していた。具体的には学業不振児問題が落第・留年や離学(退学)といった形で現れており、多様な子どもの存在を前提とした教育理論を構築することが求められていた時代である。筆者は、これまでのジョン・デューイの教育学とシカゴの実験学校の教育実践を多様な困難・ニーズを持つ子どもの観点から再評価する試みを行ってきた。しかし、デューイや実験学校が影響を受けていた児童研究の提唱者である G.S.ホールについては、未検討となっていた。そこでジョンズホプキンズ大学でジョン・デューイの博士論文を指導した G.S. ホールの児童研究を特別な教育的配慮の観点から検討することとした。本研究は計画当初には、4 年間の計画であったが、2009 年 1 月と 2012 年 11 月に出産後に育児休業をそれぞれ約半年ずつ取得したため、研究を一時中断することとなった。しかし、育休復帰後に文献調査と論文執筆を再開したこと、19 世紀末から 20 世紀初頭の資料が一部デジタル化されたことから、資料収集・分析の効率化が進んだ。主な資料（G.S. Hall Papers およびウスター市教育委員会年報）は現地の図書館でのみ閲覧可能であったため、その収集に時間を要したが、当時の連邦レベルの報告書や主要な出版物は著作権の関係でオープンアクセス扱いになったものもあり、研究環境が改善された。

２．研究の目的

本研究は、G.S. ホールが児童研究を通じて、子どもの能力の個人差をどのようにとらえていたのか、自ら学長を務めたクラーク大学では障害や困難のある子どもに対してどのような支援を行っていたのか、その時代にクラーク大学の地元ウスター市の特別教育はどのように展開されたのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

分析の対象となる資料は、1880 年代から 1910 年代に於けるクラーク大学貴重資料室所蔵の G.S. Hall Papers および Clark University Register 他（大学貴重資料）、ウスター市立図書館所蔵（Worcester Public Library）のウスター市教育委員会年報、ボストン公立図書館（Boston Public Library）所蔵のマサチューセッツ州教育法及び州教育委員会報告である。

４．研究成果

(1)ウスター市とクラーク大学の関係

ウスター市の教育員会年報の分析を通して、マサチューセッツ州第二の都市であった同市が他の都市と同様に移民の増加や就学人口の増加が確認された。1890 年代以降には、ウスターの教育委員会に設置された特別試飲会の健康調査や教育長の報告から、通常学級内の遅滞児や優秀児などの個人差への対応にホールやクラーク大学関係者が関与していたことが明らかになった。とくに教育学のホールや学校保健のバーナムは、地元の公立学校教師が大学の土曜講義に参加したり、ホールらが教員研修の講師を務めるなど、交流があった。ウスター市の児童健康調査は、クラーク大学による身体検査の協力を伴い、富裕層と貧困層の居住地区で視覚異常と聴覚異常の発生率が比較された。

無断欠席児調査は、ホールの教え子が実施し、その存在や教育内容を問題提起していたことも確認された。この調査は、子どもが学校を無断で欠席する問題を一方的に批判したり取り締まろうとするのではなく、子どもの側から気質・興味の対象、逃走の時期や逃走先の出来事をさぐっており、対象児の１６％に身体的欠損（障害）があり、トラブルを抱えた構造が立体的に描かれている。

(2)ウスター市の特別な教育的配慮の実践

1898 年―1910 年のウスター市公立学校における多様な困難・ニーズのある子どもへの特別な教育的配慮の内容がどのようなものであったか、特別学校・学級の対象児と学級種別がどのように変化したのかを分析した。

1898 年にウスター市で特別学校が開設されたが、これは単独校ではなく実質的には公立学校内に設置された「特別学級」の形態であったことが明らかになった。

1898 年、ウスター市 Providence 特別学校には、45 人の定員に対して 26 人が在籍し、担当した教員は１名であった。同じ校舎にグラマースクール、初等学校、幼稚園が設置され、特別学校もその一つとして１つの教室が配置され、校長はこれらの学校をすべて兼務した。2 校目の特別学校は 1900 年に Ledge Street 校舎に設置され、英語が話せない者(移民子弟)と身体障害（bodily disability）が対象となった。プロヴィデンス校は、1902 年には運営が軌道に乗り、手工訓練や仮称指導、体操などを取り入れつつ、学習面は７つの学年にわたって個別の指導を行った。19190 年には、ウスター市の特別学級数は１７学級にまで増え、356 人が在籍（外国生まれ 252 人）した。17 学級のうち、７つは英語以外の言語を使用して最低学年でも年齢が高すぎる生徒の学級、５つは恒久的な遅滞（permanently retarded)、５つは一時知的な遅滞のための学級であった。先行研究に置

いてウスター市は、この時期に特別学級が設置されていたと報告されていなかったため、本研究によって米国の特別学級史の一部が明らかになったことになろう。

(3)G.S.ホールの児童研究における子どもの個人差

1880-1890 年代におけるホールの児童研究の問題関心の対象、1890 年代のクラーク大学心理学部教育学科の担当講義の内容について分析を行った。その結果、ホールは 1880 年代には「標準的な知能」の発見と知見の適用に関心をもっていたが、1890 年代には異常児や英才児を含む子どもの個人差と多様性に目を向けるようになったことが明らかになった。ホールは 1878-79　年のドイツ留学では、ベルリンで精神・神経クリニックの精神病に関心をもち、実際には心理学のヴントよりも生理学のルードヴィッヒ研究室で多くの時間を過ごした。一時、医学を志すが、アメリカ帰国後は心理学の研究に取り組んだ。とりわけ 1880 年のボストン調査は、1883 年に「子どもの心的内容」として発表され、ボストン市の初等学校に入学する子どもの平均的知能を明らかにすることを目的としていた。実際には４－８才の 200 名を対象に行われ、概念形成の違いや性差、言語の発達について調査項目が編成された。育児日誌が主流の研究データに対して、ホールの調査方法は、質問紙調査であり、当時としては画期的であった。

本格的な調査はクラーク大学の学部生や院生を中心に 1890 年代後半以降に多く取り組まれた。一連の調査は、単に平均的能力を測るためではなく、教材や教育内容の編成にとって不可欠な基礎的データとなることが期待された。また子どもの知的能力のみならず、学校生活で表出される子どもの様々な感情（怒り、喜び、泣き、笑い）の対象についても分析され、情動的な側面にも広がった。ホールは、子どもの様々な情動的側面や興味を知ることによって、教師が家と学校の媒体となり、両親の視点から支援することを期待していた。

(4)クラーク大学児童研究所と G.S.ホール

1909-1914 年のクラーク大学児童研究所における G.S.ホールの役割と遅滞児への相談活動を明らかにするため、①児童研究所の組織と運営における G.S.ホール、②地元教師への研修内容、③遅滞児への相談活動の視点から検討を行った。

ホールを中心として 1909 年に設立されたクラーク大学児童研究所の取り組みに注目し、以下の点が明らかとなった。第一に運営・予算の側面では、児童研究所設立の予算獲得のためにホールが 1906 年に連邦児童局の研究所へ計画を応募し、1907 年には複数の資産家への寄付金の嘆願を行っていた事実を確認した。

第二に教師の研修では、クラーク大学教育学科のスタッフと連携しながらホールやバーナムが中心となって現職向けの講座を開き、とくに 1909－11 年には遅滞児や児童福祉に関する講義が開かれた。

しかし 1912 年以降には子どもの発達や学校保健、教育行政の内容が増え、一般教師や管理職向けに変化した。

第三に、1910 年１月に開始された遅滞児部門の相談活動では、8－12 歳児を中心に特別学級や留年を繰り返した子どもの相談や身体・運動・心理的な側面から様々な検査を多角的に行い、本人の特性や興味を考慮して進路先などを助言していたことが分かった。

以上の研究成果についての詳細は、以下の論文等に記載されている。今後の課題として、ホールの著作の検討（「教育の諸問題」等）が残された。またホールの児童研究の調査において、子どもの個人差や障害の問題がどのように扱われていたのか、さらに分析を進めることが課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 千賀愛:クラーク大学児童研究所における G.S.ホールと遅滞児の相談・研修活動 ： 設立初期(1909―1914 年)を中心に,特殊教育学研究, 51(2), 2013 年,93-103, 査読有。

② 千賀愛・是永かな子: 20 世紀初頭のアメリカとスウェーデンにおける特別学級・補助学級に関する検討-学習困難児の実態把握の方法を中心に-, 北海道教育大学紀要(教育科学編) 63(1) , 2012 年 ,99-114, 査読無。識別子コード http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/6801

③ 千賀愛:ウスター(Worcester)の公立学校における多様な困難・ニーズのある子どもの特別な教育的配慮と特別学校・学級(1898-1910 年), 北海道教育大学紀要(教育科学編) 61(1),2010 年, 75-90 (2010), 査読無。識別子コード http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2289

④ 千賀愛: クラーク大学教育学科の児童研究とマサチューセッツ州 Worcester の児童・教育問題 ： 1890-1900 年を中心に, 北海道教育大学紀要(教育科学編) ,59 巻 1 号,2008 年, 195-207, 査読無 .識別子コード http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/897

〔学会発表〕（計４件）

① 千賀愛：デューイ実験学校における多様性と個人差への視座, 日本デューイ学会第 57 回研究大会（2013 年 9 月 21 日）新潟青陵大学。

② 千賀愛: 米国クラーク大学児童研究所(Children's Institute)における異常児研究とG.S.ホール, 日本特殊教育学会. (2011 年 9 月 25 日). 弘前大学。

③ 千賀愛: G.S.ホールとクラーク大学児童研究所(Children's Institute)の設立過程の検討, 日本特別ニーズ教育学会. (2011 年 11 月 06 日). 福岡教育大学。

④ 千賀愛: 19 世紀末から 20 世紀初頭マサチューセッツ州ウスターの特別学校・学級と特別な教育的配慮"、日本特別ニーズ学会. (2010 年 11 月 07 日). 岡山大学教育学部。

〔図書〕（計１件）

千賀愛:デューイ教育学と特別な教育的配慮のパラダイム 実験学校と子どもの多様な困難・ニーズへの教育実践，風間書房，2009 年、総 342 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

該当なし

○取得状況（計０件）

該当なし

６．研究組織

(1)研究代表者

千賀愛（SENGA,AI）

研究者番号：10396335

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

是永かな子（Korenaga，Kanako　　）

研究者番号：90380302